

(2) 玉高運動会にまつわる秘話

平成十五年から玉名高校の在京同期会の世話役をおおせつかっている。還暦を迎えた昨年十六年には六回ほど会合を開いた。その集まりで必ずといって語られるのが運動会の思い出である。

それは同期の仲間にとって時代が過ぎれば過ぎるほど燦然と輝きを増していく珠玉の思い出であり、一瞬のうちに青春時代へタイムスリップするキーワードなのである。仲間の心をつなぐ一本の棒のごときセピア色の思い出、それは当時高校三年生であった「リーダー達」の若い血気に逸った熱き想いが引き起こした事件によって生まれた。

玉高運動会は今では体育祭と名前を変えて毎年春におこなわれており、現役玉高生や卒業生に限らず地元の人々にとっても、楽しみの行事の一つである。なかでも応援合戦で繰り広げる「人文字」は人々におおきな感動を与え、地域の欠かせない風物詩にもなっている。その年のテーマを若者の感性にて主張する「人文字」の素晴らしさは甲子園の高校野球の応援でよく見られるものとは異質のものだ。玉高新聞にこう書いてある。

「体育祭の目玉とも言える玉高の人文字。文字の美しさや変化の技術を競うばかりでなく強いメッセージ性を持っており、毎年時事的な内容を多く含んでいる。

玉高の体育祭には毎年五千人もの人が見に来られるため時には社会的な影響力を持つこともある。」

十数年前になるだろうか、一糸乱れぬ「人文字」の華麗さとその反面裏に潜む練習の過酷さ指摘して、NHK熊本放送が特集番組を組んだことがある。その放送をキッカケに学校内外で「体育祭」の意義について論議が巻き起こった。「簡素化論」、「廃止論」、「伝統継承論」等々の侃々諤々の議論をへて、幾多の試行錯誤を重ねながら今日の伝統ある体育祭になってきたのだ。四十三年前の我ら同期「リーダー達」の若き熱き思いが受け継がれてここまでの伝統ある行事となってきたのではなかろうか。我ら仲間の自負であり誇りとして今でも会うたびに懐かしく語り合っている。そしてそれは母との思い出とも重なるのである。

平成十五年、100周年を迎えて発行された「玉高新聞」にこう記載されている箇所がある。

昭和三十六年、この年は建築ブームの影響で業者に檣の設置を頼むことができず、やむなくテニスの観覧席を四つに分けて檣の代わりとした。当時の檣は土台のみを業者に依頼し、イスの設置や飾りつけなどはすべてリーダー達によって行われていたため、安全性を懸念した学校が「簡素な体育祭に」との要望を出した。そのためリーダーは生徒を蛇ヶ谷に集めて話し合いを行い、結局現行のまま、という結論を出した。今に続く体育祭はこのようなリーダー達の努力によって受け継がれてきたのである。

玉高新聞（創立100周年記念号）

体育祭～怒涛の一世紀～

「継承した伝統」のなかの記事を抜粋

（赤字下線は筆者）

たった二行の記事だが、真相はすこしばかり違っている。その当時にプレイバックしてみよう。

昭和三十五年、高校二年の秋のことである。

生徒会長選挙が行われた。同級生に勧められ立候補した。好きな人におだてられればすぐその気になる。いかんともしがたい単純な性格だが、いかんせん吾その器にあらず。結局は健闘むなく落選して生徒会議長に就くこととなった。三学年二十四クラスの学級委員からなる生徒議会の議長職である。形式的なものであるはずであったが、一年後の三年生秋の運動会が終わった後に、大変な役目がまっていたのである。

今の運動会は受験勉強を考慮して春先に開かれているが、その当時の運動会は秋に開催されていた。昭和三十六年の運動会は十月八日におこなわれた。

全校生徒千五百名が赤、白、黄、紫色の四グループにわかれ、最上級生の三年生が取り仕切る。競技種目と仮装行列と応援合戦の三部門で点数を競い合うのである。

第四グループの総責任者となった私は白色を引き当ててしまつてチョット悔しい思いをしたが、結果は三部門とも一位で完全優勝の快挙を成し遂げた。とくに最後を飾る応援合戦は白色であったがための爽やか印象点により優勝を勝ち得たようなもの。それ以降白色は私の好きな色となった。

仮装行列の企画は、悩んだ末に打ち出したテーマが「玉高六十年史」である。二年後に迎える創立六十年を先取りしてその歩みと今後の展望を仮装行列で表現したのだ。

このアイデアが来賓審査員に受けて一位となった。今でもこの企画はクリーンヒットだつたと思っている。私はこの仮装行列で新校舎建築のために陳情を受ける建設大臣の役をひきうけた。母は後に手紙で私の役は陳情する県知事の役割だつたと書いているが。

ちなみに校舎は平成十三年に国の重要有形文化財に指定され、百周年を迎えた今も「白亜

の殿堂」として、昭和十二年建築されたままの状態です。立派に聳え立っている。あの当時日本列島を覆っていた「スクラップアンドビルト」の熱気が新校舎建築を夢見させたのだろうか。いいものは残していくことも大事なんだと今頃になって痛感させられる青春の思い出である。

そして私の職業も建設業に携わることになるとはあの当時予想すらしなかったことだが、運命のいたずらであろうか。三十八年もの長い間建設業に携わることになってしまった。建設大臣にはなれなかったが、楽しい夢をみさせてもらった。

運動会の最後を飾るのは応援合戦である。「リーダー達」にとっては応援合戦で優勝することこそが最大の目標であった。それ以外はどうでもよかった。それだけに皆、必死であった。わが白組の応援団長は野球部のキャプテン T が選ばれており、リーダー達十人ほどを近くの菊池川に集めてキャンプ合宿をはりながら運動会当日の応援合戦に備えた。しかし好事魔多し、本番二日前の総練習で肩甲骨を痛め戦線離脱である。この急場を救ったのがリーダーのなかの一人、空手部のキャプテンの K だった。K は応援団長の代役を引き受け僅か二日で応援のスタイルを見事に纏め上げた。得意の空手で勝負するしかないというある種の開き直りが功を奏した。白鉢巻に白たすき、黒い学生服、白と黒の空手スタイルが鮮やかであった。三〇〇人からなるメンバーの心をつかみ、一糸乱れぬ「人文字」を演じてみせたのである。彼には白色が似合った。急場を救った彼の勇姿が感動の涙で霞んだ。

優勝の呼び声高かった黄色のチームが最後に演じた。完璧な演技であった。が、人文字の最後がちょっと崩れた。一糸乱れず爽やかに演じた我が白組の逆転優勝である。かくして完全総合優勝を成し遂げ、総責任者として優勝旗を受け取るという光栄に浴したのである。

当然母も見に来ていた。中学のときの運動会で味わったあの悲しい思いとは何と違ったことだろう。息子の晴れ姿は、母にとって終生忘れることのできないものとなったようである。翌年、弟博之が玉高に入学した年も見に行き、そして三十五年後、博之の長男の博樹が入学したその年も見に行っている。ほかの孫たちにも玉高運動会はいよいよ、ぜひ玉高にいきなさいと勧めるのである。そのことを手紙に書いている。

去る十二日に邦臣の母校玉高の運動会に何十年振りに見に行きました。博樹が高一で入学頑張ってますので昔のことを思い出して家族全員で出かけたのですが、私は折角見るのだったら入場式からと張切って、一人だけ一番のバスで出かけました。行進から始まって開会式と久し振りに充実した一日をすごす事ができました。

邦臣のときに一回、博之のときに一回行ったような？と思い出し乍ら、帰って早速アルバムを引っ張り出してみたら、有りました。邦臣が仮装行列で（新築請願中）の寺本県知事以下のお偉方になってグラウンド一周したこと・・・そのときの事が思い出されてとても嬉しくなって一寸若くなったような気分になりました。

どこの人が解らない奥さんと隣り合わせに見学しながら「又来年も見に来ましよう

初」と約束して帰って来たんですよ。

博之が高一のときも見に行っただんですがはだかで体操（全員）してるのに一人だけ青白く痩せてる生徒がいた、それが内の息子だった事は忘れません。その当時何を食べさせていたのやら・・・兎に角幸せな一日を過ごすことが出来ました。

さやのときも暢之のときも見に行くよって言ったら、玉高に行ってるかどうか？解らんよ！と云われて、アラ「ほんなこつネ」と云って笑いこけましたけれど、みんな行かせたい、行ってもらいたいと思う「婆々心です」。

（平成八年五月二十四日 母よつね七十五歳のときの手紙）

運動会そのものも私にとっては忘れがたい思い出であるが、運動会の後におこった事件がいっそうその思い出を燦然と光り輝かせるのである。

応援合戦は二、三〇〇人を乗せる櫓が四つ必要である。予算や安全面から何年も廃止がさやかかれていた。そして私たちの運動会までは現状どおり実施するが来年からは廃止することなどでなんとか開催された運動会であった。

その運動会も無事終わった。しかし、このような応援合戦はこれが最後だ、もう来年からはできないと思うと、合宿をやりながら練習に励んできたリーダー達がおさまらなかつた。自分たちまではちゃんとできた応援合戦が後輩たちは出来なくなるのだ。それで俺たちは良いのか？

若い正義感が爆発した。学校側や生徒会との話し合いも物別れに終わり、三十人ぐらいのリーダー達は強硬手段に訴えた。

校長室占拠事件の勃発である。私も総責任者としてリーダーの仲間に加わっていた。校長室のなかに持ち込んだ机と椅子でドアを塞ぎ氣勢をあげ学校側の頑なな態度を非難した。先生たちが校長室の外から懸命に説得する。しかし怒りに燃え上がったリーダー達には通じず結局一晩占拠を続けた。どのような経緯で占拠し開放したのか今では忘れてしまったが、校長室でバリケードを組み氣勢を挙げたシーンだけは鮮やかに蘇ってくる。

その後日本の各地でおこる「学園紛争」のはしりとも思える事件で、「時代の空気」が小さな田舎町にも及んできていたのだろうか。

後日談がある。その時の校長は中野又男先生であった。その校長先生のお嬢さんと結婚した人が私と同じ会社である時期一緒に働いていたのだ。酒を飲んで昔話をされていてわかったことであるが、世の中は狭いと思った。

こうして正義感に燃えた若き集団は「校長室占拠事件」で終わらず、高校の近くの「蛇ヶ谷」に集結、籠城し世間に訴えようとしたのである。

このときの3年の統括担当教師がT先生である。1～2年のときは担任を持たれたが3年のときは学年主任をされていた。先生は奔走された。主だったリーダー達を説得して廻られた。私の家にも訪ねてこられた。母も同席した。

なんとか頼む、君の力で皆を説得してくれと。しかし私には皆を説得する力はない。それではみんな何を考えどうしようとしているのか教えてくれと。

先生の悲痛な叫びが私の心臓に突き刺さる。この騒動が世間にばれたら大変なことになるのだ、就職も進学も！先生の頬に涙が光った。

そばでじっと聞いている母のまなざし、母はそのころもう私に説教はしなくなっていた。息子を信じてお前の思うようにやりなさい、でも後悔しないように、とのまなざしであった。

先生と母の間でしばらく考えた。高校生としてどうあるべきか。これ以上騒いでどうなるのか。本来の目的はいったいなんだったのか。

そして決心した。涙をこらえ、「蛇ヶ谷集結・籠城計画」を打ち明けた。

こうして T 先生の尽力により籠城事件は大きな騒動にならずにおさまった。このときのことを先生は誰にも言われていないようである。母はもちろんなにも言わなかった。先生と母と私だけの秘密だが、二人とももうこの世にいない。打ち明けてよかったのだろうか。今でもすこしばかり心の痛む青春の秘密の思い出である。

このあと事態の收拾に学校側とリーダーたちを含めた全校集会が開かれる事となった。

全校生徒の大多数は校長室占拠事件も蛇ヶ谷籠城未遂事件も知らないできごとであった。一部の血気に逸るリーダー達の若き思いがもたらした行動であった。しかし伝統ある玉高運動会をなんとか継承し残していきたいと本心から思っただけの行動であった。そのリーダーの思いを全校生徒のまえで思いっきり話してもらおう、全校生徒に聞いてもらおう、そのうえで学校側にも誠意を見せてもらおう。それしか解決の方法はない。これが T 先生に打ち明けたときの私の提案であった。

こうして全校集会が開かれた。リーダーたちは自分たちの決起行動が未然に防がれた思いがくすぶっている。1年前の十月に当時の社会党委員長浅沼稻次郎を殺害した山口音矢が17歳であったがために、17歳の少年を「恐るべき17才」と称していた時代である。1500名の全高生の中に血気にはやる30名ほどの17歳のリーダー達。なにを引き起こすかわからない。そんな不安ななか生徒会議長の私がこの集会の司会をするのである。大変な役回りである。しかしここは私でなければならぬと少しばかりの気負いも手伝って、毅然として司会進行につとめた。1～2回ざわついたが、凛として裁いた。集会が終わった。二時間ほど経過していた。

真っ先に私のところに駆けつけられたのは T 先生であった。

学校側の「櫓は来年以降も現行どおりで行う」という英断をまとめていただいたのである。先生に目で感謝した。二人だけにしかわからない感動が胸に渦巻いた。多感な十七歳のときの思いは余韻となって長く人生を彩った。先生には高校3年間一度も担任になってもらっていないが、このことがきっかけで先生がなくなられるまで担任以上の薫陶をいただくことになったのである。

これが「創立百周年記念号玉高新聞」にいう「リーダーは生徒を蛇ヶ谷に集めて話し合いを行い、結局現行のまま、という結論をだした。」の真相である。

(母の思い出前半生記終わり)